

2004/5/31 講演会

トゥッサン・ルーヴェルチュールからエメ・セゼールまで

ルネ・ドゥペストル／今井 勉 訳

【 2004年5月31日、東北大学大学院文学研究科にて、作家ルネ・ドゥペストル René DEPESTRE 氏による講演会「トゥッサン・ルーヴェルチュールからエメ・セゼールまで *De Toussaint Louverture à Aimé Césaire*」が開催された。コメンテーターに、今回、氏を招聘された一橋大学大学院の恒川邦夫教授をお迎えし、導入としてドゥペストル氏の業績をご紹介いただいた。ドゥペストル氏は1926年ハイチ生まれの詩人・小説家・評論家。キューバに長く滞在した後、1978年以降フランスに在住。1988年に小説 *Hadriana dans tous mes rêves* でルノー賞、1993年に詩集 *Anthologie personnelle* でアポリネール賞を受賞。詩・小説を発表する傍ら、ネグリチュードや現代のクレオール性をテーマに活発な評論活動を行っている。今回の講演では、ハイチ革命の立役者ルーヴェルチュールからネグリチュードの旗手セゼールに至る脱植民地主義の歴史をめぐる、氏自身のセゼールとの交流なども交えて、興味深いお話を聞くことができた。講演前半ではルーヴェルチュール（1743-1803）の業績がフランス革命の展開と絡めて紹介された。サン＝ドマング（ハイチの旧名）のサトウキビプランテーションの奴隷の家に生まれたルーヴェルチュールがフランス語の読み書きを覚え、読書によって知的形成を遂げた後、1791年以降、逃亡奴隷を組織し、フランス革命による本土の政治的社会的大変動と植民地問題論争を背景に、史上初の黒人革命を準備していく歴史のダイナミズム、とりわけ、1801年、黒人総督として独自に起草した「ルーヴェルチュール憲法」の歴史的意義が浮き彫りにされた。その第一条で、サン＝ドマングは植民地領土としてフランス帝国に帰属するが、しかし、独自の法律に従うと謳った思想がナポレオンの忌避するところとなり、結局、ルーヴェルチュールは謀略によって捕縛され獄死するに至るが、この憲法草案に見られる、人種を超えて普遍的な自由平等の人権思想は、政治思想としてだけでなく人類の文明史を考える上で極めて重要な価値を持つことが強調された。続く後半では、20世紀の脱植民地主義運動の中でルーヴェルチュールを再評価した1913年生まれのマルチニックの詩人エメ・セゼールへと視点が移される。伝記的介绍に絡めて、1967年にドゥペストル氏自身がセゼールと対話した折の体験も紹介された。いわゆるネグリチュード運動の中心人物としてイデオロギー的側面に評価の重点が置かれがちなセゼール像に対して、ドゥペストル氏は、「しかし、優れた詩人エメ・セゼールの叙情は、彼の思想の中心にあるネグリチュードをも含んだ、理論やイデオロギーの単調な枠組を、大きく超えるものであり、世界史の聖火にも比べられるものとして残っている」として、セゼール詩における詩的眞実の祝祭を高く評価する。最後に、ルーヴェルチュール没後200年記念の2003年春にこの歴史的人物が獄死したジュラ山中の要塞跡を訪問した折、突如、セゼールの詩『帰郷ノート』中の、悲痛なルーヴェルチュール讃歌の一節が思い出され、思わず涙したというエピソードが紹介され、国際的な市民社会における人間の連帯への希望に触れて、話が閉じられた。日本から遥か遠いカリブ海の18世紀と20世紀の大人物二人を現代の文脈の中で再評価するドゥペストル氏のお話は、現代史の生き証人とも言える氏自身の言葉の迫力と共に私たち聴衆にとって感銘深い時空の旅となった。（今井勉記）】

ハイチを訪れたことのある人なら誰でも、トゥッサン・ルーヴェルチュールという人物に対するハイチの人々の尊敬にすぐに気づくことでしょう。この崇敬の念にはしかし、しばしば、神秘的な調子が含まれているようです。そのため、時には、この例外的な人物がたどった運命をしるしづけた歴史的な事実を不明瞭なものにしてしまうこともあるように思われます。

1791年から1802年までの間に実際に起こった様々な事件は、サン＝ドマングのフランス植民地におけるこの黒人指導者の、困難を乗り越えた成功、そして1803年4月7日に、ナポレオンが支配するフランスの（ジュラ山脈にある）要塞で、寒さと孤独のうちに獄死することになる彼の死に至るまで、歴史的に導いたものでありました。

そのような事件から200年が経過した現在、トゥッサン・ルーヴェルチュールと彼をめぐる事件について厳密に、また、愛情を持って語るために、ハイチ出身のフランス人作家である私としては、彼について、あらゆるうわべだけの賞賛の言葉によって語るのではなく、明晰なかたちで位置づけることが必要であると感じています。現在進行している世界化の現象は、トゥッサン・ルーヴェルチュールに、諸々の文明の歴史において重要なひとつの意義を与えております。その意義は、国際的な市民社会の形成に向かって進みつつある21世紀の今日、世界中で十分に認識されるべき重要性を含んだものと言えます。

実際、民主主義的に統一された世界は、やがて、トゥッサン・ルーベルチュールという人物のうちに、奴隷制度と植民地主義の島に生まれながら、（フランス革命の理念である）人権と、正義と、民主的市民権の普遍化というプロセスの中に、非ヨーロッパの人民を参画させた最初の人物であったということに気づくことでしょう。

では、なぜ、マルチニック島の偉大な詩人エメ・セゼールを、ハイチ革命の英雄トゥッサン・ルーヴェルチュールと並べて、同じ文明的な地平の上に置くのでしょうか。

理由としては、18世紀のルーヴェルチュールと20世紀のセゼールは共に、植民地主義の解放（脱植民地主義）という世界的な文脈において密接な関係を持っているということがあります。歴史上の異なる二つの時代に、植民地主義という条件の中で、カリブ海の二つの小さな島に生まれた両者が、共に、文明の生んだ悲劇的な出来事がアフリカとカリブ社会の生活に課した試練に打ち勝つべく、自らが「世界」であることに、この二人は、覚醒することが出来たのでした。

サン＝ドマングのサトウキビプランテーションの奴隷であったトゥッサン・ルーヴェルチュールはある時、（フランス革命の理念であった）人間の権利と市民の権利、当時はただヨーロッパの「白い」人間にだけ切り分けられていたこれらの権利を「黒い」人間へと普遍化するというに自ら覚醒しました。一方、マルチニック北部の町バスポワントのつましい家に生まれたエメ・セゼールは、カリブの薄明かりの朝の果てに、その生まれながらの詩的才能によって、博愛という普遍的な原理にもっとも近い人間的関係とは何かということ、さんさんと輝く太陽の光をもって、高らかに歌い上げました。カリブ海に生まれた二人は、その後、旅に出て、それによって、自分の場所と他者の場所を、故郷の家と他の様々な文明の持つ文化の異郷を発見します。そして、その両者のうちに、人類の唯一

にして同一の兄弟を見出し、それを寿ぐことになるのです。

トゥッサン・ブレダは、1743年5月20日、ノエ伯爵の領地であったブレダという名のプランテーションで生まれました。ブレダはサン・ドマング北部のオー・デュ・キャップというところにある地名です。

言い伝えによれば、彼は、アフリカのダホメ、現在のベニンのアラダス族の王子の末裔に当たるといことです。彼は第二世代の奴隷で、アフリカ出身の両親の息子でした。トゥッサンは背が低く、虚弱で、あまりものを言わない子供で、顔もどちらかという美しくなかったといことです。しかし、彼の性格は、鋼（はがね）のように強いものでした。彼は、青年期の初めから、ゲーテの言葉を借りれば、「自らの肉体に対して、その精神を尊重することを教えこむ」人々の一人だったようです。

プランテーションの主人バイオン・リベルタの厩舎（馬や）付きとなった彼は、獣医学の初歩をマスターし、薬草の知識も得ました。かたわら、彼の代父であったフランス人ピエール・バチストからフランス語の読み書きを習いました。こうしてフランス語を覚えた彼は、数は少ないですが、若干の書物に接するようになり、こうした読書を通して、植民地のアビタシオン（プランテーション）の馬方としての自分の判断力と自覚を養うようになりました。

そのようにしてプランテーションで接することの出来た書物の中で、トゥッサン・ブレダ（ルーヴェルチュール）はおそらく、ジュール・セザール（カエサル／シーザー）の『ガリア戦記』、ヘロドトスの『（戦争の）歴史』、モーリス・ド・ザックス元帥の『河』、（奴隷解放と植民地問題に大きな役割を果たした）レナール神父の『西インド諸島の哲学的歴史』などを読んだものと思われる。とりわけ、レナール神父のこの有名な著作の中で引用されている、（フランス18世紀の啓蒙主義の中心人物である）ドゥニ・ディドロの百科全書に見られる次のような予言的な記述は、アビタシオン・ブレダの独学者の想像力に強い印象を与えたのではないのでしょうか。

ディドロは次のように書いています。「黒人たちに欠けているのは、彼らを復讐へと導くのに十分な勇気を持ったひとりの指導者である。自然が、人間という種族の名誉のためにおそらくは保持しているはずの、その偉大な人間はいったいどこにいるのだろうか。その（ローマ時代に反乱を起こした）スパルタカスはどこにいるのだろうか。彼はクラススを見出せないままだ。しかし、その人間がひとたび現れたなら、黒人法（コード・ノワール）などは消滅するだろう。そして、征服者が報復の権利だけを考慮するならば、今度は逆に、白人法（コード・ブラン）が制定され、恐るべき猛威をふるうことだろう。」

フランス革命の同時代人であったトゥッサン・ルーヴェルチュールが、自らの運命に課したのが、まさに（このディドロの予言的な言葉が示したような）壮大な企てだったわけです。1793年、50歳に達した時、彼は奴隷制度のもとにある同志たちにこう呼びかけました。「兄弟たちそして同志たちよ、私はトゥッサン・ルーヴェルチュールという者である。私の名前はおそらく諸君の耳に届いているかもしれない。私は復讐を企図した。自由と平等がサン・ドマングにあまねく行き渡ることを私は望んでいる。私は、自由と平等を存在

させるために身命を投げ打つ覚悟である。諸君、我らの大義のために、一致団結せよ。」

こうした希望の言葉は、逃亡奴隷の黒人たち（プランテーションから逃亡し、島内の孤絶した山間部に籠もって抵抗運動を組織した黒人たちのこと）のグループの間で熱狂的な支持を受けました。逃亡奴隷は、1791年以來、反乱を起こすたびに厳しく制圧され、ハイチ北部の山間部で蜂起の機会を窺う勢力となっていました。

サン・ドマングのプランテーションや工場（こうば）で怒っていた黒人たち以外にも、植民地の他の社会階層、たとえば、大規模土地所有者の白人たちや、商人あるいは職人団体に属する白人たち、解放された混血たちなどが、黒人奴隷たちと同様に、激しい興奮状態にありました。各階層は、それぞれの個別の利害に基づいて、フランス本土で起こった1789年の革命による政治的、社会的な大変動を解釈していたわけです。

パリでは、憲法制定議会、立法議会、国民公会というように次々と変わる議会において、革命政治家たちの間でも、サン・ドマングでの「植民地問題」の盛り上がりを前に、意見はまっぴたつに割れ、深い亀裂を呈していました。

一方にいたのが、植民地主義の利権を守ろうとする側の政治家たちです。バルナーヴ、マルーエ、モロー・ド・サン・メリー、マアリ神父らは、サン・ドマングの混血や黒人の解放に好意的になるような意見を押し込め込むためなら、できることは何でもやっていました。彼らにとって、人権と市民の権利は輸出できるものではなかったのです。人間と市民の権利には、大西洋横断のための海を渡る足はなかったというわけです。

こうした植民地主義のロビイストたちに対して、他方に、解放派の一派がありました。それは、ロベスピエール、マラー、グレゴワール神父、コンドルセ、ミラボー、デュポン・ド・ヌムール、ブリッソ、ヴィエフリユ・デゼッサールといった人たちによって構成されていました。彼らは、グレゴワール神父によって設立された「黒人友の会」の会員でした。このグレゴワール神父という人は、非常に寛容の精神に富んだ人物で、フランス革命自体に対しても極めて時代に先んじた考え方の持ち主でありました。

こうした奴隷解放派の人々やその支持者たちは、自由と平等を切り離すことのできない不可分の価値であって、それはすべてのフランス市民が区別なく、肌の色や社会的な条件（階層）とは関係なく全員が享受できるはずのものだと考えていました。

たとえば、ロベスピエールは、権利の平等という問題について深く掘り下げて考え、サン・ドマング問題についての議論が起こったときに、次のように叫びました。「もしも、植民地の農園主たちが、彼らの利益に最も都合のいいような法令を作ることを脅迫によってわれわれに強要するのであれば、そんな植民地は滅んでしまうがいい」と。

また、マラーはさらに一歩進んでいました。彼は、植民地化された人々の権利は、完全に自由にされるべきことを説いてこう言いました。「あらゆる自由な政府の基礎は、すべての人民が権利において他の人民に従属されないこと、すべての人民が自らに与えた法以外の法を持つべきではないこと、すべての人民が自らにおいて至上権を持ち、いかなる人間の力からも独立した至上権を持った存在であること、である」と。

こうした高貴で寛大な原理原則が打ち出されていたにもかかわらず、パリの議会はなかなか、サン・ドマングの抑圧された奴隷たちの解放へと向かう民主的な道を進もうとはし

ませんでした。それほど、植民地貿易と奴隷売買に携わる大農園主たちの力が至る所で強
力に働いていたということです。反植民主義と反奴隷制はまだ、若干のエリートの精神
に宿っているだけの段階だったと言えるでしょう。全体としては、フランス革命が人々の
メンタリティーに例外的な前進と飛躍をもたらしたにもかかわらず、反植民主義・反奴
隷制という政治的な概念は、当時の時代意識にとって、まだまだ縁遠いものにとどまっ
ていたというわけです。

したがって、トゥッサン・ルーヴェルチュールの第一の功績は、フランス革命の中で、
もうひとつの革命を実現しなければならないということ、つまり、黒人と混血による革命
が必要であること、自分たちの法と自分たちの価値、自分たち独自の目的、自分たち自身
の発展の見通しを持った、黒人たちによる革命を実現する必要があるということ、他の
誰よりも早く、また、より深く認識していたことでした。ルーヴェルチュールが考えたこ
の「黒人革命」は、しかし、フランス本土で進行しつつあった新たなフランス社会の解放
のリズム・内実と断絶してはならないという見通しが彼にはありました。

トゥッサン・ルーヴェルチュールは、革命の二つの歴史的な情景を観察しながら、こう
気づいたのです。すなわち、サン・ドマングは、彼の影響力のもとで、ジャコバン主義の
フランスが推進することの出来なかった、権利と平等と人間解放の実験を、大西洋の反対
側で、個別化すると同時に普遍化する義務を持っているということ、このことに気づいた
のでした。

そして、トゥッサン・ルーヴェルチュールの第二の功績ですが、それは、フランス革命
の内部で「ハイチ革命」を行うという決意をひとたび固めた彼が、それ以前は逃亡奴隷た
ちのグループがばらばらに起こしていた反乱をひとつにまとめ、規律を持って統一された
ひとつの解放軍へと育て、結集したことでした。

ルーヴェルチュールはこう言っています。「われわれが求めているのは一時的なうわべの
自由などではない。われわれが求めているのは、肌の色が何であれ、赤であれ、黒であれ、
白であれ、どんな人間も、他の人間の所有物になることは出来ないという原則を絶対的に
採用することなのである」と。こうして彼は、(フランス革命が掲げた)人間と市民の権利
宣言に対して、世界的な、普遍的な地平を切り開いたのです。そうした構想は人類の歴史
の中で初めてのことでした。

トゥッサン・ルーヴェルチュールは、軍隊の暴力を用いて行動を起こすことに反対する
人ではもちろんありませんでしたが、どちらかといえば福音主義的な感受性の持ち主でし
た。彼の精神と気質は穏健主義的なもので、白人の敵との知的な妥協・協調を好むもので
した。彼の指導する部隊がゲリラとして組織されるとすぐに、彼は、自分のゲリラ部隊を、
ためらうことなく、フランス革命とフランス共和国に奉仕させました。彼は自分が、一個
師団全体を指揮する将軍であること、フランス共和国軍隊の部隊長であることを誇りに感
じました。

したがって、このようなルーヴェルチュールの勧めとイニシアティヴがあって、まず 1793
年 8 月に、植民地において白人の役人ソントナックスが、続いて 1794 年 2 月 4 日に、パリ
において国民公会が、奴隷制度の廃止を決定したのでした。それが、1789 年の大革命以降、

フランスの敵となっていたスペインとイギリス（の王政）による攻撃からフランス革命の利益全体を守るための最も確実な方法でした。スペインとイギリスは、当時、いくつかの植民地を領有していたカリブ海諸島で軍事的に展開していたからです。

1794年から1801年まで、トゥッサン・ルーヴェルチュールが行き届いた責任ある指導のもとで、サン・ドマングでは、すべてが正義と自由の正しい道を進んでいけるように見えました。ルーヴェルチュールは植民地総督に昇進し、フランス化した「コモンウェルス」（島々と本国が結びつく共栄圏）の可能性を示唆しました。それについて、彼はサン・ドマング独自の憲法を作成し、それを公布しました。その第一条ははっきりとこう謳っています。「サン・ドマングとそれに付随する島々はひとつの植民地領土を構成し、この植民地領土はフランス帝国に帰属するが、しかし、この植民地領土は独自の法律に従うものである」と。

この「1801年のルーヴェルチュール憲法」の序文は、英知と想像力と独創性と政治的な良識に満ちたものでした。そこで彼はこう言っています。「数世紀にわたる長い歴史の中で、人々の運命を決定する、たった一度しかないチャンスというものがある、もしそれを逃したら、二度と再びそういうチャンスはめぐってこないような、そういう状況というものが存在するのである」と。

この憲法の理想は、当時の政治思想から見てもかなり進んだものを持っていました。1801年7月16日、黒人総督ルーヴェルチュールは、当時フランスの第一統領であったナポレオン・ボナパルトに宛てた書簡の中で、自分が起草した憲法のそうした理想を忠実に伝えました。ナポレオンはすぐさま、そこに、自分の権力に対する裏切り行為があると考え、時をおかずに、トゥッサン・ルーヴェルチュールをサン・ドマングの政治舞台から遠ざけようと決意します。黒人の将軍が起草した憲法が体現していた1789年の原則の普遍化のプロセスは、ナポレオンの理解するところとはならなかったのです。植民地に関する事柄、そして「人種」に関する事柄については、ナポレオンは王政アンシャン・レージュムの間人そのものでした。さらに、マルチニックの白人女性、ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネとの結婚によって、革命が転覆したはずの貴族のクレオールの上流階級に属する眠っていたということもありました。

ナポレオンはこう言っています。「アフリカ人にどうして自由を与えることなどできようか。何らの文明も持たず、植民地とはどういうもので、フランスとはどういうものかもわからなかった人間たちに、どうして自由を与えることができるだろう」と。

もし、トゥッサン・ルーヴェルチュールのサン・ドマング憲法がフランスの第一統領ナポレオンによってよく理解されていたとしたら、それは、人権思想の国際的な広まりにとって決定的な進歩であったろうし、19世紀の初頭から、文明の歴史の質的な飛躍が達成されていたことでしょう。

やがて皇帝となる人物の弁護のために一言言っておかなければなりません、それから十数年の後、セント・ヘレナでの苦しい孤独の中で、ナポレオンは、彼の黒人のライヴアルの想像力に満ちた寛容さと比べて、自らの政治的な見通しの狭小さと精神の気品の欠如に気づくこととなります。偉大な軍人であり、ナポレオン法典（市民法）を作った明晰な行

政官でもあったわけですが、人権を中心とする人間思想を普遍的な社会のレベルへと大きく広げ、強めていくことはどうしてもできなかったということに思い至るわけです。

ナポレオンの同国人である、ロマン主義の詩人アルフォンス・ド・ラマルチーヌは、トゥッサン・ルーヴェルチュールの生涯を描いた 1850 年の劇作品の中で、「この男はひとつの国である（この男ひとりでひとつの国家に相当する）」という一句を発することになるでしょう。また、ヴィクトル・ユゴーにも同じようにトゥッサン・ルーヴェルチュールを高く評価する意見が見られますし、イギリスやドイツなどヨーロッパの偉大な作家たちの中にも、同じような見解が見られます。

しかし、トゥッサン・ルーヴェルチュールの歴史的な重要性を、その死後一世紀以上を経た時点で、政治思想の大胆さにおいてのみならず文化や文明の進展において持つその意義を、しかるべき高さに位置づけたのは、マルチニクの偉大な詩人エメ・セゼールの役割に負うところが大きいと言えます。

セゼールはこう書いています。「トゥッサン・ルーヴェルチュールの戦いは、形の上で唱えられた権利を現実の権利に変えるための戦いであった。それは、人間を真に「認知」するための戦いであった。そのことによって、彼は、彼自身とサン・ドマングの黒人奴隷の抵抗を、世界の文明の歴史の中に刻み込んでいるのである」と。

1801 年のルーヴェルチュールの戦い、非人間的な仕打ちを減らすための彼の戦いは、20 世紀に至っても終わることなく、そこに、エメ・セゼールの登場を待つことになります。奴隷制度は（1848 年に）廃止されましたが、植民地のシステムは 1884 年のベルリン会議以降、第二の大きな再編を迎え、ヨーロッパ列強は世界の帝国主義的な分割をまた新たに行うことになりました。その世界が、トゥッサン・ルーヴェルチュールの素晴らしい後継者、ルーヴェルチュールの度量に匹敵する相続者であるエメ・セゼールの立ち向かう世界となります。

エメ・セゼールは 1913 年 6 月 26 日にマルチニクのバスポワントで生まれました。砂糖会社の会計係だった父親と内職で繻い物をする母親の間に生まれた彼は、幼い頃から学業に秀でた子供でした。小学校でも中学校でも、優等生でした。そして、高校は、フォー・ド・フランスのヴィクトル・シェルシェール高校に進みます。シェルシェールは 19 世紀の有名な奴隷廃止論者です。同年代の若い仲間たちと遊んだり散歩したりすることよりも、セゼールはシェルシェール図書館で孤独に書物を友とすることのほうを好んだようです。

バカロレアの試験に合格した後、高等研究奨学金の支給を受けて、マルチニクを離れ、パリ大学に行くこととなります。1931 年、18 歳のとき、セゼールは有名なりセ・ルイ・ルグランに籍を置いて、エコール・ノルマル・シュペリユール（パリ高等師範学校）の入学試験準備をします。そこで、学友として一番の友であり、やがて生涯の友となるのが、セネガル人のレオポル＝セダール・サンゴールでした。サンゴールもまた、詩人として、また、政治家として、かくかくたる未来を持つことになる人物です。1935 年、セゼールはノルマリアンとなり、一方、サンゴールは同じ年に、ソルボンヌで、文法教授資格（アグレ

ジェ)を得ました。

1967年に私はセゼールと対話する機会を持ちました。その時に、彼は、30年代に三つの影響を受けたと、私に話してくれました。

第一に、フランス文学の影響。マラルメ、ボードレー、ランボー、ロートレアモン、アポリネール、クロードルといった人たちの作品を通してフランス文学から受けた影響。

第二に、アフリカの影響。サンゴールの示唆と、当時の最良の人類学者モーリス・ドラフォスやレオ・フロベニウスの著作を通して発見したアフリカの影響。

第三に、(アメリカの)ハーレムの黒人ルネッサンス運動の影響。セゼールは、1937年に、高等文学研究免状という資格を得るためのレポートで、「合衆国の黒人アメリカの詩における南部のテーマ」を取り上げました。このレポートは、彼にとって、アメリカの黒人の文化についての知識を掘り下げる機会ともなりました。

彼の知識の基本となるこれら三つの方向性に加えて、すばらしい記憶力のおかげで、パリでの勉強の日々は、百科全書的な知識に対する彼の好奇心を大きく広げることができました。

こうした該博な知識によって、彼は、非常に質の高い作品を書くことができるようになり、黒人インテリゲンチヤの第一級の人物の位置に昇りつめることができるようになります。黒人知識人は、アフリカ、カリブ海、北米と、出身は様々ですが、戦間期のパリで、彼らは、同じひとつの運命共同体に所属しているのだという意識を持っておりました。アフロ＝アメリカンの「ディアスポラ」(フランス語系、英語系、スペイン語系)とアフリカとの接触から、いくつかの機関紙や雑誌が生まれ、そこでは、彼らの共通の要求が主張されることとなります。こうして、多様なかたちでの、黒人運動の高まりが見られるようになり、この運動は、数度にわたったパンアフリカ会議を通して、アフリカとカリブ海の状況の多様性を越えて、「人種」的な含みをもった文化的同一性の大きなうねりを活気づけることとなり、それが続いて、いわゆる「ネグリチュード」運動を引き起こすことになるわけです。

1930年代、エメ・セゼールの精神の形成期にあたる1930年代は、したがって、インテリゲンチヤと黒人の問題にとって、ひとつの転換期だったと言えます。植民地解放運動の先駆となった彼らの運動は、パリの芸術と文学のアヴァンギャルド(前衛)の共感と連帯から多くの利益を引き出すことができました。時は、ジョゼフィン・ベーカーの時代、アンドレ・ブルトンとその詩人仲間たちによるシュルレアリスム運動の時代、ピカソをはじめとする天才画家たちの時代でした。時は、マルクス主義とフロイトとブルトンの理論に融合を求めている時代、モデルニテ(現代性)の政治的、文化的、「人種的」問題の間にひとつの融合を求めている時代でありました。

カリブ海の若い世代が出した出版物としては、ルネ・メニル、ジュール・モヌロ、エチエンヌ・レロによる『正当防衛』という名の雑誌や、サンゴール、レオン・ダマス、セゼールによる『黒人学生』という名の雑誌などがあります。こうした知的・芸術的な沸騰状態の背景には、ロシアの10月革命、イタリアのファシズムとドイツのナチズムの台頭、極東では日本の軍国主義、フランスの国民戦線、エチオピア危機、スペイン内戦といった大

きな時代背景があり、こうした眩暈のような歴史の渦が、やがてくる第二次世界大戦の危険の高まりを予兆させるものとなります。

1930年代のこうした政治的・文化的な驚くべき増埒は、エメ・セゼールの個人史において重要な意味を持ちました。彼は、パリでの勉強熱心な日々を終えようとしているところであったと同時に、20世紀の詩の最も輝かしい冒険のひとつをこれから始めようとしているところでした。私は、私の評論集『混ぜる仕事』の中で、決定的に重要な同時代人であるセゼールが、カリブ海の、アフリカの、ヨーロッパの、ラテンアメリカの、そしてアメリカの知識人たちのいくつもの世代の人々の感受性と知のあり方に及ぼした影響について書き記したことがあります。1944年、ポルトープランスでのセミナーの折、セゼールは私の世代の若者たちを前に、詩について、知識について、博愛というものについて、世界のあらゆる社会における生活について、考えることを教えました。彼の素晴らしい教育のおかげで、私たちは、自分自身の内部を旅すること、植民地主義が偽りの堆積の下に埋もれさせてきた深い「自我」を獲得するために他者のほうへと旅すること、を学びました。

ハイチ人の過去に対する（詩人としての）彼の個人的なまなざしは、私たちに、世界の人間性がトゥッサン・ルーヴェルチュールに負っているもののすべてを発見させてくれたのです。

セゼールはこう言っています。「トゥッサン・ルーヴェルチュールがやってきたとき、それは、人権宣言を文字どおりに受け入れ、卑しい人種などというものは存在しないこと、マージナルな国などというものは存在しないこと、例外的な人民などというものは存在しないことを示すためにやってきたのだ。そうした原則を血肉化し、(地域の実情にあわせて)個別化し、いわば、原則に活力を与えるためにやってきたのだ」と。

エメ・セゼールにおいて、鍵となる若干の著作の中に、脱植民地主義の複雑なダイナミズムについての非常に深く掘り下げた分析が見出されます。また、スターリン主義の分析、ソヴィエト流の擬似社会主義革命の崩壊以前の20世紀の諸革命の分析によって、セゼールは、「革命」という言葉で理解されているものが、モスクワでも、プラハでも、北京でも、ハバナでも、ハノイでも、ベルリンでも、結局は、人民の従属化・隷属化のもっとも不寛容な形式が次から次へと回帰する形式にすぎなかったということを示しました。共産主義を自称する個人や党の全体主義的な圧政・暴政に、ロシア、ポーランド、中国、ヴェトナム、ドイツ、グルジア、キューバの人々が服従するしかなかったということを示したのです。

人間の諸関係における民主的な人権と文明の質的な向上ではなく、20世紀の「社会主義革命」は、博愛のカリカチュア、民主主義社会の中で自由と友愛をもって生きるということのカーニバル的なパロディを、世界に対して示したに過ぎなかったのです。

エメ・セゼールの仕事は、評論、劇、詩と多くの領域にわたりますが、彼はその仕事を通して、宗教と古くからの英知の最良の遺産と、現代性の最も貴重な経験を統合できるような新しい世界文明の創造を唱えました。それは、民主主義と人間の諸関係の中で生きる喜びの、前代未聞の貫徹と成功をめざしたものでした。

しかし、優れた詩人エメ・セゼールの叙情は、彼の思想の中心にある「ネグリチュード」

をも含んだ、理論やイデオロギーの単調な枠組みを、大きく越えるものであり、「世界の歴史の聖なる火」にも比べられるものとして残っています。この火こそは、彼の詩の状態のもっとも重要な実質を、祖国の人間全体に対する憐憫と優しさに満ちた実質を形作るものであります。

実際に、セゼールの詩は、シュルレアリスムの創始者であるアンドレ・ブルトンが認めたように、「人生のスペクタクルを前にした感情の異常な強度」をさらに高める力に満ちていると言えます。ブルトンの言葉を使えば、セゼールの詩は、「海よりも広く、どんな高い木よりも高く、歴史のどんなに美しい伝説よりも深い」意識を持って高揚している詩であると言えるでしょう。セゼールの詩には、自然の三つの世界（動物界、植物界、鉱物界の三つの世界）が同時に含まれているというわけです。

セゼールの詩のすべてのページにおいて、わたしたちの喉もとと内臓をえぐるのは、その詩的真実であります。それは、人間の言葉のディオニュソス的な、真実の、宇宙的な祝祭であると言えます。

こうした賛歌が読者の心を最もよく捉える書物が、セゼール 26 歳のとき、正確には、1936 年から 1939 年にかけて、パリで書かれた著作、ちょうど彼がパリでの学業を終え、マルチニクに帰郷しようとしていたときに書かれた著作です。それは雑誌発表された彼の最初の作品でした。その作品によって一気に彼は自分独自の形というものを見出します。その独自の形式は、彼が大学で学んだ様々な知識の貯蔵庫をいっぱい埋めていた詩的伝統とは自由に断絶したところで、見事なまでに自分自身であることを可能にするものだったのです。

実際、『帰郷ノート』と題される長編詩は、詩人の伝記そのものより以上に奥深いところで「セゼール的な」精神的実存体験の印を刻まれた作品であります。この作品が私たちに体験させてくれる叙情の冒険は、ひとつの例外的な成功であり、カリブ海文学の歴史において、ひいては、本土の伝説的なフランス文学の装備を持つことから始まったフランス語圏文学の歴史においても、決定的に重要な大事件であると言えるでしょう。

エメ・セゼールの詩作品が、世界のすべての文学の中でも、もっとも優れた叙情と同じ木に発し、同じライオンの、同じ夜鳴き鳥の、同じ暑さと同じ寒さの、同じ海の腕に抱かれた末裔から生まれた作品であるということを私が認めたからといって、それは何も、香炉を持ってセゼールをひたすら顕彰するためにしていることなのではありません。セゼールの詩作品は、その全存在を賭けて、詩と思想のレベルでも、革命と自由の観念の政治的・文化的歴史のレベルでも、人間の条件の最も高い響きに結びつけられております。

トゥッサン・ルーヴェルチュールの没後 200 年の記念日であった昨年 2003 年 4 月 7 日に、私は彼が獄死した土地である（ジュラ山脈山中の）フォール・ド・ジュー（ジュー要塞）を訪問し、ある経験をいたしました。フランスのジュラ山中の要塞の小さな独房跡で、そこでは、たくさんの巡礼の人たちが瞑想していましたが、突然、私の記憶のうちに、『帰郷ノート』の次のような一節、それはトゥッサン・ルーヴェルチュールの獄死に捧げられた一節なのですが、それが突然、私の記憶の中に浮かび上がってきたのです。

« Ce qui est à moi
c'est un homme seul emprisonné de blanc
c'est un homme seul qui défie les cris blancs de la mort blanche
(TOUSSAINT, TOUSSAINT LOUVERTURE)
c'est un homme seul qui fascine l'épervier blanc de la mort blanche
c'est un homme seul dans la mer inféconde de sable blanc
c'est un moricaud vieux dressé contre les eaux du ciel
La mort décrit un cercle brillant au-dessus de cet homme
la mort étoile doucement au-dessus de sa tête
la mort souffle, folle, dans la cannaie mûre de ses bras
la mort galope dans la prison comme un cheval blanc
la mort luit dans l'ombre comme des yeux de chat
la mort hoquette comme l'eau sous les Cayes
la mort est un oiseau blessé
la mort décroît
la mort vacille
la mort est patyura ombrageux
la mort expire dans une blanche mare de silence. »
(Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Présence Africaine, 1983, pp.25-26.)

「ぼくのものであるのは
白に閉じ込められたただひとりの男
白い死の白い叫びにただひとり立ち向かう男
(トゥッサン、トゥッサン・ルーヴェルチュール)¹
白い死の白いハイタカを射すくめる男
白い砂の不毛の海の中のただひとりの男
天の水に対して立ち上がった年老いた黒ん坊
死がこの男の上に輝く輪を描く
死が彼の頭の上に優しく星を散りばめる
死が彼の腕の中の実った砂糖キビ畑に狂ったように吹き荒れる
死が白い馬のように牢獄の中をギャロップする
死が猫の目のように闇の中にきらめく
死が珊瑚島の海面下の海水のようにしゃっくりする
死は傷ついた小鳥だ
死が衰える
死がよろける

¹ 1743-1803. 1791年の黒人奴隷の大蜂起に始まるハイチ革命を指導し、1801年、憲法を制定して終身総督となったが、ナポレオンの派遣したフランス軍に謀略で捕らえられ、1803年、フランスのジュラ山中で獄死した。

死は怒りっぽいパチュラ²だ
死が静寂の白い沼の中に息絶える。」
(砂野幸稔訳による)

私の目を覆う涙の中で、私の胸を締め付ける嗚咽の中で、死者であるトゥッサン・ルーヴェルチュールと存命の詩人であるエメ・セゼールの二人が、私には、同一の友愛の精神として、ひとつに結びつき、この世界に向かって、国際的な市民社会における命の通った人間性を深めるために可能なことはすべて成そうではないかと要求する友愛のひとつの精神へと結びつくように思われたのです。人間と文明の地平を目指して。

2004年5月20日レジニャン・コルビエールにて
ルネ・ドゥペストル

² 南アメリカの森林に住む小型の有袋類。死の近い者を見分け、同伴すると言われる。